きらり人輝く

第49回 岩手読書感想文コンクール

岩手読書感想文コンクール（岩手日報社・日報岩手書店会主催）で、久慈小学校の西舘光尊くんが小学校の部（中学年）最優秀賞、久慈高校の中村樹里さんが高校生の部で優秀賞を受賞しました。

小学校の部 中学年（3、4年）
最優秀賞

課題図書『えんぴつ太郎の冒険』

ぼくにできること

西舘 光尊（にしだて みつたか）くん（久慈小4年）

担任の先生に勧められて読んでみた本で、夏休みの読書感想文として書きました。最優秀賞をもらったと聞いたときは、すごくびっくりしました。

えんぴつ太郎みたいに、小さなことでも自分ができることを進んでやるのが大切だと気づき、今でもお風呂そうじなど家の手伝いを続けています。

「何もできない。」

と言ってやらないでいるより、自分にできることをして、まわりの人を助けてあげたい。

ぼくは、『えんぴつ太郎のぼうけん』という本を読んだ。この本は、男の子がお父さんからもらったえん筆に「えんぴつ太郎」と名前をつけ、とても短くなったころ、つくえの後ろのせまいすき間にそのえん筆が転がりこんだことから、ぼうけんが始まる物語だ。

ぼくが一番心に残ったのは、持ち主の男の子に忘れさられた気のどくな子ぶたの指人形を助けようと、えんぴつ太郎がお手紙を書くことを思いついたところだ。短くなってちっぽけなそんざいになってしまったえんぴつ太郎が、自分が何をしてあげられるのかに気づき、何とか役に立とうとがんばっていた場面である。

そんなえんぴつ太郎とくらべて、ぼくは、どうだろう。「ちっぽけなそんざいでも、自分ができることをがんばって助けてあげたい。」

ぼくも、そんなことは、いつも思う。でも、実さいにやるのは話がべつだ。何をしたらいいのか、どうやったらいいのか、わからない。えんぴつ太郎と同じように考えることはできても、ぼくには行動にうつすことができないんだ。

ぼくの母は、四月に仕事をかえた。働く時間を長くしたそうだ。毎日、時間が足りないといそがしくしている。かわいたせんたく物がたたまずにソファーに置いてあることもある。そんな母を助けてあげたいとしょっちゅう思うのだけれど、ぼくは、何をすればいいのかわからない。ぼくができることで助けてあげられるのか。ぼくには、何ができるのか。ぼくには、えんぴつ太郎のような勇気がないなとさびしくなった。

でも、ちがった。母は、ぼくにありがとうを言ってくれる。おふろをそうじした時やモップをかけた時、そして、たたみ方を知らなかったせんたく物をたたんだ時に、

「ありがとう。」

と言ってくれたのだ。ぼくは、何もできないと思っていたけれど、知らないうちにたたみ方も覚えて母を助けることができていたのだ。きっと、えんぴつ太郎も、自分に何ができるのかなんて先のことは考えていなかったんじゃないかと思う。今、できることをがんばる。これなら、ぼくにもできる。

『えんぴつ太郎のぼうけん』を読んで、小さくなっても最後まであきらめない心が大切だと感じた。ぼくは、何もできないからとあきらめているより、自分ができるちょっとしたことでまわりの人を助けてあげられるようになりたい。そうやってできることをふやしていきたい。きっとそこがぼくのぼうけんのスタートなんだと思う。

高校の部
優秀賞

自由図書『シンドラーに救われた少年』

木箱の上で

中村 樹里（なかむら じゅり）さん（久慈高2年）

去年は入選だったので、自分の書いた感想文を評価してもらえたこと、また新聞に掲載され、たくさんの人に読んでもらえたことをうれしく思います。私が選んだ本は、第二次世界大戦中のナチスドイツに迫害されたユダヤ人の物語。「受験前にじっくりと考えながら読書する機会を」と選びました。平和とは、ありふれた普段の生活を送れる幸せであり、それを築いてきた先人たちの苦しみや涙に、しっかりと目を向けていかなければならないと感じました。

ぶらりくじ歩き

住民に親しまれる八幡さま
侍浜の「八幡宮」

問 侍浜公民館 ☎58―2110

ご神木の「侍浜八幡宮の大杉」は推定樹齢400年。市指定文化財の天然記念物です。

侍浜郵便局向いに「八幡さま」の通称で親しまれる八幡宮があります。大永年間（1521～1527年）に久慈氏が侍浜町に村を開いた際、氏神として建立されました。現在の八幡宮は、老朽化により改築され平成25年5月に建て替えられました。

身近にある神社として、家内安全、無病息災、縁結び、合格祈願など事あるごとに町民が手を合わせ、また毎年8月15日の例大祭には多くの人が訪れます。古い歴史と伝統に裏打ちされ、侍浜の地域に今も変わらず鎮座する八幡さま。今年の初詣は侍浜八幡宮に足を運んでみませんか。

My life in Kuji

レネー・エストリッジ さん

インディアナ州・28歳 ／ 夏井小、久喜小、小袖小、久慈中、宇部中、山形地区の小中学校を担当

クリスマスの祝い方

年を追うごとに、日本のクリスマスのお祝いが盛大になっているように感じています。町を彩るイルミネーション（電飾）やお店のデコレーションを見ていると、まるでアメリカにいるみたい。

でも、1つ大きな違いがあります。それは、クリスマスの食べ物。日本では、フライドチキンやクリスマスケーキを食べますが、アメリカではフライドチキンを食べる習慣はありません。

また、ケーキも日本のものとはまったく違う「フルーツケーキ」が一般的です。このフルーツケーキですが、見た目が悪く、食欲をそそらないばかりか、重たくて胃にもやさしくありません。

ですから、私の家ではフルーツケーキは食べず、代わりにみんなでクッキーを焼いています。この季節、我が家のクッキーが恋しくなります。でも、私はそれ以上に、目にも美しく、胃にもやさしい日本のケーキが食べたいです！

皆さん、メリークリスマス！そしてよいお年を！

市内の小・中学校で英語を教えているALT（外国語指導助手）の皆さんが、久慈で生活していて感じたことなどを紹介するコーナーです

協力隊だより

辻野 忠さん
（つじの ただし・50歳）
15年のセラピスト（心理カウンセラー）活動を経て昨年、久慈市の地域おこし協力隊に。市民の心に寄り添った活動を進めている。

声をあげればまちは変わる！

12月12日、山形町の日野沢公民館に辻野さんの姿がありました。元気なまち久慈市になるよう、辻野さんは自身のセラピー（癒しカウンセリング）経験を生かした活動を先々月より開始。日野沢公民館では地域のみなさんと笑顔をともにして、それぞれの悩みごとや地域課題などさまざまな事柄を共有していました。

「どんなことでもいいので私に話していただき、心を軽くしてほしい。皆さんが住んでいて良かったと思う笑顔あふれる久慈になれば素敵ですから」と話す辻野さん。今後もさまざまな場所に出掛け、皆さんと会話していきます。（記・宇部芳彦）

会話が弾み笑顔がこぼれる辻野さん（写真左）

地域の皆さんと車座トーク

●**地域おこし協力隊**…移住定住促進を目的に、都市部からの移住者に対して市が委嘱。地域おこしの支援（地域行事やイベントの応援、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PR、情報発信など）や農林水産業への従事、住民の生活支援など「地域協力活動」を行います。